

モン・サン・ミシェルとルルドの調査

愛媛大学法文部教授

内 田 九州男

モン・サン・ミシェル

それでは、モン・サン・ミシェルとルルドについて述べることにする。

モン・サン・ミシェルは非常に有名な観光地で、皆さんもご存じだろうと思う。モン・サン・ミシェルは、その正面に対して右下に自動車道が通り、その向こう側も狭くなっていて、その間に満潮時には水が入ってくるため、非常に孤島的なイメージがある（図6）。「サン」は「聖人」、「ミシェル」は「大天使ミカエル（フランス語読みでミシェル）」であり、その人に教会を奉納するという意味で、ここを「サンミシェル」と呼ぶようになった（図7）。

図6 モンサンミシェル全景
(山川廣司氏撮影)

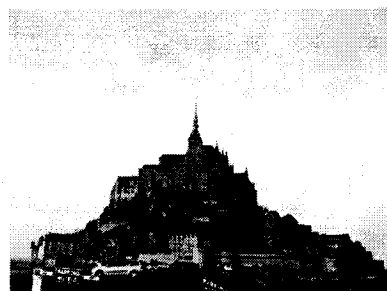


図7 サンミシェル
(絵はがき複写)



モン・サン・ミシェル建立前は、その場所は島（岩山）であった。浅瀬の中に岩山があり、岩盤も完全に岩山である。それが湾の中に三、四ヶ所あり、それが修道院、あるいは教会に仕上げられていったようである（図8）。

私はフランス語は全く駄目なのだが、幸いなことにジャンポール・ブノワという人が書いた文章（『ル・モン・サンミシェル』）が日本語訳されており、それを購入した。以下は、その本から要約したモン・サン・ミシェルの歴史である。

「モン・サン・ミシェルの歴史（概略）」

○現在のモン・サン・ミシェルの地はかつてはシシィの森と呼ばれ、その中に3～4の岩石があって、その一つがモン・トンプ（後のモン・サン・ミシェル）であった。ここに隠修道士（*）が早くから集まっていた。

○8世紀の初頭隠修道士達がこのモン・トンプに二つの小礼拝堂を建立した。

○同じ頃、森にあった司教館に住む司教オペールは夢の中で「聖ミシェルに、モン・トンプに聖堂を建てるように」との命令を受けた。オペールは農民を集め最初の聖堂建設に着手、一方ではイタリアのモンテ・カリガノに使者を送って大天使の聖遺物を求めさせた。使者は「赤いマントの一部」と大天使が足をふれた大理石一片を入手した。（この頃岩石は海に囲まれるようになった。）

○708年10月16日聖堂が、司祭オペールによって聖ミシェルに奉納される。オペールは12人の聖職者を集め土地を与えて自給自足の生活をさせた。

○9世紀にはいると、この聖堂は知名度が増し巡礼が行われるようになった。この時期この岩石がモン・サン・ミシェルの名で呼ばれ広まる。

○10世紀ノルマンディ公の支援のもと、ベネディクト会修道士が進出。

図8 湾内の島とモンサンミシェル
(絵はがき複写)



○この後、ノルマンディ公等の支援で各種の寄進をうけ、大修道院へと発展した。百年戦争（14世紀中頃からほぼ1世紀）の間要塞化が進んだ。（ジャンヌダルクのもとに現れフランスからイギリス人を追い払うように命じたのは聖ミシェルであった。）モン・サン・ミシェルは「中世のあらゆる要塞化技術の体現」となる。

○11～12世紀になると民衆の巡礼も始まり中世キリスト教徒の信仰が追求された。

「サンチャゴ・デ・コンポステラの規模ではなくとも、やがて巡礼の道順が確立する。そこで大量の人の波を修道院に迎え、また旅行中寝る場所と食料を確保する必要が生じた。」巡礼の記念品は貝（ブカルド）、金属製の小像であった。こども巡礼も行われた（14C, 15C）。

○1790年修道会禁止の政令発布で修道会は姿を消した。

○監獄としての利用。12世紀ロベール・ドゥ・トリニィが地下に監獄をつくった。百年戦争の間数多くの捕虜を拘留した。「鳥かご牢」もあった。（1777年廃止）。19世紀牢獄機能は残ったが、1863年に刑務所廃止。1865年巡礼が再開された。国が大規模な修復に乗り出す。1965年最初の修道士が戻る。

*「隠」は「いん」と読むようだ。平凡社『世界宗教事典』（初版第4刷，1997年）には「隠修士」（いんしゅうし）の項がある。当日参加者から同様の御教示をいただいた。

ここから、建物内には様々な問題が存在するようである。図9は「モン・サン・ミシエルの立体構造」で、よく世界遺産関連誌には同様の絵があるが、これはフランスで手に入れた英語版のモン・サン・ミシエルの本（『The Mont-Saint-Michel stone by stone』）に掲載されているものである。モン・サン・ミシエルは三層に分かれている。まず一番下の層と中間の層があり、その上に三層目がのる。ただし、岩盤が突き出ているため一層目の中央部はなく、二層目も岩盤が突出している部分があり、そして一番上の層がある。私たちもここまで上がったが、廊下や道にあたる部分に岩山が所々に頭を出していた。岩山をうまく利用しながら上に上にと建物を作ったのである（逆に、上部を作り、必要となり下層を作ったという可能性もあるが）。

さて、大変面白いものがあつたため写真に収めてきた（図10）。先の英語版の本にも載せられている（図11）が、これは巻き上げ式起重機で、あるミュージアムに復元品が存在するらしい。この中に人間が入り、歩くのである。ハムスターの回し車と同じ理屈である。この中を人間が歩くことによって、周りの水車のような輪が回り、ロープがぐるぐると巻きつき、重い物を引き上げるのだそうだ。これを「巻き上げ式の起重機」と呼んでいる。それを示す言葉が“The windlass-crane and its cart (XIXth century) in the old ossuary.”で、

図9 モンサンミシエルの
立体構造
（『The Mont-Saint-Michel
stone by stone』）

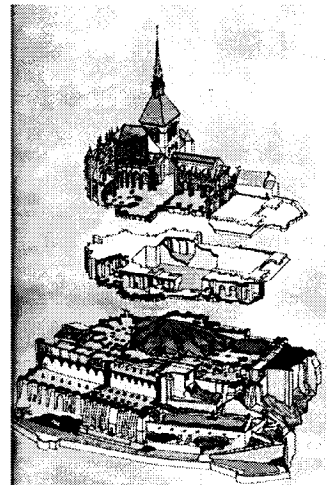


図10 巻き上げ式起重機

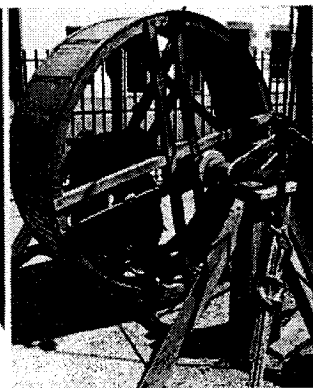


図11（『The Mont-Saint-Michel stone by stone』）の図版

*The windlass-crane and its cart
(XIXth century) in the old ossuary.*



*The same system in miniature
(Douarnenez port-museum).*



“cart”は「荷車」というような意味である。また、“in the old ossuary”については、「古い納骨堂の中」という意味になるが、この起重機のある部屋自体がそういうものに使われていたということだろう。この巻き上げ式の起重機そのものについては、19世紀になりこの刑務所を管理した行政側が、物を引き上げることを目的として設置したそうである。

次に、モン・サン・ミシエルの町の中の様子についてである。

(図12) 入ってすぐのところに、はね橋が設置されている。これはまさに城塞としての装置である。夜あるいは敵が攻めてきた際には、設置された鎖を引き上げることで、橋の部分が跳ね上がり、橋を渡れないようにするというものである。

(図13) これは非常に大きな銃眼である。銃眼とは、中に銃を差し込み発砲し、外の敵を倒す装置である。これが一番下の壁に多く存在する。

(図14) また、町の通りはこのように非常に狭い。もともとスペースのない場所に町や教会を作っているの、かなり狭い道に沿って土産物屋や食堂があるという形になっている。

(図15) “PELERIN (ペルラン)”は「巡礼者」を意味するようで、「巡礼者の家」という意味だろうが、宿ではないかと思う。ここ(下部の横書き文字)には歓迎するような意味合いの言葉が入っているので、宿泊所に使われたのかもしれない。同様の看板が、同じ通りに二、三ヶ所見られた。巡礼が行われているため、巡礼者を受け入れる施設ができていたのである。

図12 はね橋



図13 銃眼



図14 町の通り

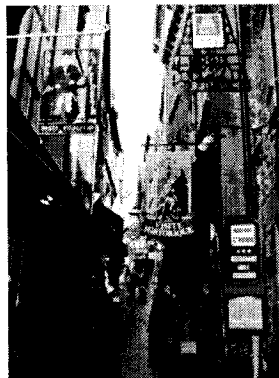
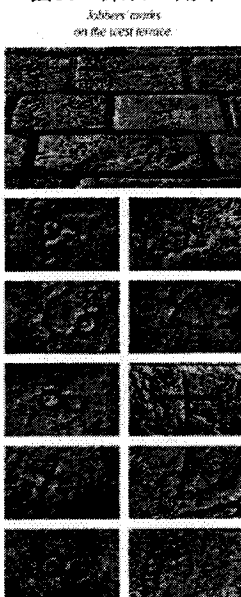


図15 巡礼の家



(図16) 私は城郭も研究しているので、これは大変興味深い。日本の城郭の石垣には職人が彫った刻印がある。こゝにも床の最上部にはめ込まれている石にマークが入っている。これは職人の仕事だと記されている

図16 床石の刻印



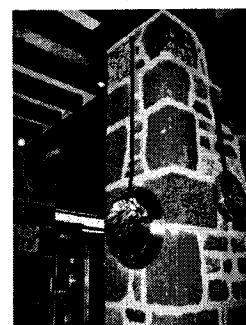
が、日本でみられる刻印と全く同じものである。ただ、どのような意味があるかについては書かれていない。

(図17) 帰り際に休憩に入ったレストランで面白い物を見つけた。壁に彫りこんであり、その中に人形が飾ってあるのである。この人形は貝を身につけ、杖を持ち、瓢箪状の水筒と思われる物を持っている。これは巡礼者を表わしているようだ。

図17 レストランの柱の穴の巡礼者の人形



図18 レストランの柱の長柄のフライパン



(図18) これもレストランで見つけたものである。柄の長いフライパンで、巡礼者用のオムレツを作る際用いているものである。非常に長い柄が特徴的である。以上がモン・サン・ミシエルの様子である。そのもっている雰囲気から非常に多くの人が押し寄せるといった印象がある。ただ一時期牢獄となっていたという歴史もあるため、内部の記録類はなくなっているようである。石造物のため、建物そのものが壊されたということはないようである。新しい巡礼宿ができてきているようなので、新しい巡礼の拠点になっていくのではないかなと思う。

ルルド

次に、ルルドについて述べる。

ここは寒波の影響もあり、十分な調査ができなかった。原因は二つあり、一つは前述した通り大寒波により巡礼者がほとんど来なかったこと、二つ目は私の準備不足である。普通の巡礼地だと思い、きっちりとした準備をしなかったのである。寺戸淳子氏の『ルルド傷病者巡礼の世界』という専門書を持って出かけたものの、あまりに専門的で、詳細についてはよくわからなかった。

ルルドは、この本の書名にも「傷病者巡礼」という語があるように、傷や病を持った人が、自らの回復の願いをもってやってくるという巡礼地である。私達が冬に訪れたのは間違いだったと思ったのは、特急列車が止まらず時間の齟齬があったためである。

駅を降りると、まず町がある(図19・20)。これは、多くがホテルで、他に「オスピタリテ」関連の施設もあるようである。ホテルはルルドの聖域へ行く巡礼者が泊まる「傷病者宿泊施設」等のホテルである。ところが、巡礼者は傷病者が中心のため、当然介護者が付いてくるため、非常に多くの人が「門前町」に出かけてくることになるのである。

その町の中に、ベルナデッタのブロンズ像(図21・22)を発見した。この像を解説したプレートに“saint”と刻まれているように、「聖地ルルド」発祥の起源となる、マリア出現を感知した(マリアの出現に際し、話をしたなど)女性である。彼女の出身地はさらに山奥ではあるが、町の中に銅像が設けられているのである。

図24の看板にあるように、ルルドの聖域は、川が「く」の字に曲がり、その角に門があり、橋を渡って聖域に入るようになっている(図23)。看板の絵の奥のグリーン部分がルルドの中心部である。

前述したように、私達が訪れた時は

図19 ルルドの町



図20 ルルドの町



図21 町にあるベルナデッタのブロンズ像 図22 像に添えられたプレート



図23 ルルドの聖域の入り口



図24 聖域の説明看板

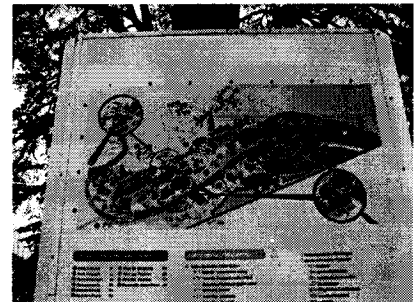
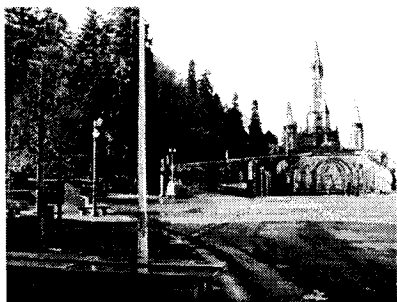


図25・26・27 聖マリア大聖堂

(聖堂正面とその左)



(聖堂正面)



(聖堂正面とその右)



非常に寒波の厳しい時期だったため、雪を集め整備した道とそうでない道があるという状況で、通常いるはずの巡礼者を見かけることは少なかった。門から入ると大聖堂の正面があり、それが両翼に展開するような形で大変大きな大聖堂が作られている(図25~27)。

さて、マリアの出現地はこの奥にある。大聖堂の右側を入っていくと、大聖堂の下の方山に多くの

蛇口が並んで取り付けられている(図28・29)。最初は人々が何をしているのかわからなかったが、蛇口のところにいる参詣者は水を入れる器を持ち、水を汲みに来ていたのである。これを通り過ぎると、マッサビエル洞窟(図30)に行き当たる。こゝがマリアが出現した場所であり、それを意味するようにマリア像が飾られている。また、周囲には口ウソク立てや大量の椅子が置いてあり、巡礼者たちがこゝに座り、行われるミサその他に参加するという構造になっている。更にまた洞窟を右側に進むと、石造りの施設(図31)が現れる。当初は気付かなかったため写真撮影に行かなかったが、これは沐浴をする場で、中にある部屋で沐浴をすることができる。内部のつくりは、中央に沐浴をする施設があり、腰をかけて湯あみができるようになっている。

マッサビエル洞窟では、1858年2月から7月にかけて、マリアが18回出現した。その際、先程の女性(ベルナデッタ)が全て話をしているということである。その最後の段階で、マリアが「私は無原罪のおやどりです」といったことが教会関係者に伝えられ、その存在がマリアだと確認された。こうしてルルドは、マリア出現の地として教会が正式に認めていくことになったようである(ロメオ・マジョーニ著・杉原寛信訳『ルルド巡礼者のしおり』)。

巡礼地調査に行ったにも関わらず巡礼者の具体的姿をほとんど見ることはできなかったのは非常に残念であった。ルルドは、その場で行われる巡礼の在り方が他の巡礼地とは異なる。四国八十八ヶ所の巡礼行為は、本堂と大師堂があり、巡礼者が勝手に参詣・祈願し札を納めて帰るというものである。キリスト教の教

図28 水汲み場

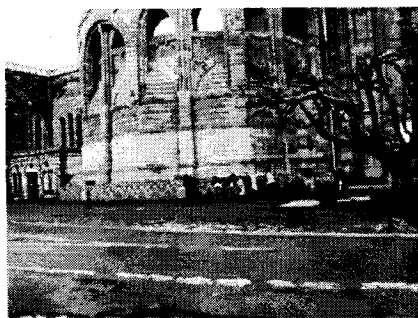


図29 聖水を汲む人



図30 マッサビエル洞窟

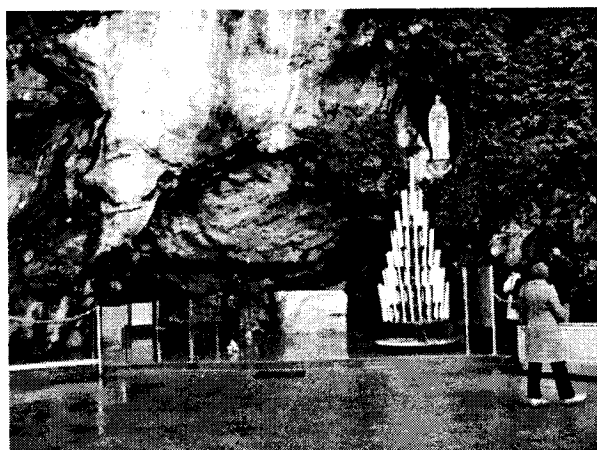


図31 沐浴場



会も、一般に同様である。ところが、ルルドでは巨大なイベントが催される。それが一番のポイントとなっているのではないかと思う。

次に、巡礼の様子であるが（『奇跡の聖地ルルド』〔文：田中澄江、写真：菅井日人〕を参考にした）、車椅子やストレッチャーなどに乗ってやってきた巡礼者をボランティアスタッフが手助けをする。巡礼者には必ず一人ボランティアが付くそうである。また、イベント前には非常に大変多くの巡礼者が集まり、並んで待機するのである。そして、司祭たちが集まりミサを行う。これは普通の聖地では考えられない部分であるが、ルルドでは、「聖体行列」及び「聖体顕示」が行われる。これは、マリアを示す聖遺物に近いものが準備され、それが洞窟から始まり、庭をずっと巡り歩くのである。その近くに巡礼者たちは車椅子・ストレッチャーで待機しており、司祭たちが聖体を示すものを持ち、司教が入ってくる。そして巡礼者の周囲を聖遺物とともに歩いて回ることによってマリアの加護を祈るのである。逆に、巡礼者たちはここで様々な祈りを大きな声で叫ぶ。これが昼間の行列である。

次に、夜になるとロウソク行列が行われる。これは、一人ずつロウソクあるいは松明を持ち、集まってくる。これが午後8時45分である。昼の聖体行列は午後4時30分、つまり夕方に始まり、2回目が夜になるということから、先程述べたように、巡礼者たちが感動するのは聖体顕示、あるいはロウソク行列の中にある。こういった場所で奇蹟が起こるのである。

筆者たちは昼前に駅に着き、現場に行って調査し、ガイドブックを手に入れるため情報センターとなっている、巡礼者のための博物館を訪ねた。しかし昼休みだったため閉鎖されており、本が全く手に入らなかった。諦めて帰ったが、こういった点が私の調査不足であった。聖体行列やロウソク行列の時間などの情報を把握できていれば、多少異なった対応ができたのかもしれない。ただし、他のルルド関連書によると、傷病者の付き添い人はこの行列に参加しているが、前述の川向こうから眺めている人もいるようなので、巡礼者でなく巡礼を見ている人間は行列内には入れなかった可能性がある。その理由は察せられるため、仕方ないと思う。これらの行列に遭遇することができなかったのは非常に残念ではあるが、逆に、人の少ない場所で写真を撮れたというのは良かったのではないかと考えている。

おわりに

モン・サン・ミシェルは修道士が中心となった修道院で、かつその中に教会があり、主に中世の時代に非常に信仰の篤かったところで、その頃巡礼も盛んに行われている。ところがルルドに関して言えば、現在大変盛んな巡礼地の一つだと思う。傷や病を持つ人々が、自分の回復をかけ、非常に切実な願いが持ち込まれる場である。日本にはなかなかこういった場はないと思う。ただ、私たちが四国遍路を研究して考えるのは、人々はなぜ四国遍路に出るのかという議論を一層行わなければならないということである。先程の車椅子やストレッチャーのようなものは、現在でも札所に行けば同種の道具が保存されていることもある。箱車というものも残っている。箱車は、人や生活道具を積み込み、介護人が押して回るといったものである。過日も、高知で本堂に三基並べられたものを見た。このように、現在生きている人々が切実な願いをもち、それを遍路にかけていると考えている部分があるため、私たちはそこを十分に考えなくてはならないと思っている。こういった願いは、普通諸願成就といい、現在を生きていく上での諸々の願いを持ち、それを実現する方途として巡礼に出るのである。私たちは、そういった遍路に出る契機の議論を強めなくてはならないと感じ帰途に就いた。

